

## 人種的共同性の再構築のために

——黒人性再想像運動の経験から

松田素二

はじめに

一九八〇年代以降、人文・社会科学において強力な思潮となった社会構築主義が、まずはじめに脱構築を試みたのが、性と人種であった。その結果、生物学や人類学といった近代科学の世界だけに限って言えば、人種というコンセプト自体が消失していったと言つてよいだろう。しかしながら、人種というタームの科学的脱構築が、人種にまつわるさまざまな社会的事実を消去・無意味化したわけではないことは言うまでもない。人種の相違にもとづく差別や紛争は、二一世紀の今日にいたるまで、脱構築以前と同様、ときにはそれよりも激しい形態をとつて現象している。

本章の目的は、人種という概念の脱構築の過程で抜け落ちた、人種的共同性を希求する錯綜した諸力を考察することにある。それは言い換えれば、人種的共同性の再評価への可能性を見とおすものになるはずである。もちろん、この人種的共同性の再評価は、人種の本質化や人種主義的な制度や言説の肯定を意味するものではない。あくまでも人種の脱構築という、困難で革命的な作業の正当な評価のうえになされる試みなのである。

人種という「眼差し」を可能にしたのが、対象を固定し体系的に分類するという西欧近代が編み出した特異な思想

の力であつたことは間違いない。植物や動物への素朴な関心は、フーコーの指摘するように、近代市民社会の成立とともにそれ以前の「珍奇な見せ物の行列」であることをやめ、「タブローの形をした展示様式」に変換された。<sup>(1)</sup> すなわち「ある種のを体系的に除外することを条件とする感覚的認識」となつたのである。動植物がもつさまざまな形状や部位、あるいは味や風味、さらには寓話や想像界といったトータルな存在につきものの諸属性は、分類の邪魔でしかなかつた。この複雑な諸属性の束からなる存在を分類するためには、どれか一つの属性を恣意的に選択し、他のあらゆる要素を体系的に無視することが必要だつたからだ。たとえばリンネは、植物の最も本質的な部位として、他のさまざまな部位を恣意的に排斥し、おしべとめしべの形状を唯一の弁別基準として選択することによって近代植物分類学を創設した。

一七世紀の西欧に誕生した動物や植物に対する分類学の眼差しは、一九世紀になると人間の分類と同定へと向かうことになる。そのさい恣意的に選択された分類のための属性こそが、肌の色という可視的な弁別基準であつた。この基準をもとにして、あらゆる人間を分類することは、必然的に対象を全体のタブロー(表)のなかで配列することを意味した。そして配列することは序列化することと同義であつた。こうしていったん人間観の序列化が完成すれば、相互の関係性はもはや平等ではなくなり、優等と劣等や進歩と未開といった非対称的な関係が自然に生じることになる。そして二者のあいだに優劣関係が成立すれば、優者(白人)の劣者(黒人)に対する保護と支配を正当化するまでは連続的な変化となるのである。一九世紀中葉以降、蓄積されてきた人体の形質形状に関する多様な計測法や実験の学的展開は、じつはこのような特異かつ強力な分類の眼差しによって、その活動の舞台をつくりあげられていたことになる。

以上の経緯を考えるならば、人種を脱構築する思潮がこれまで、まずこの分類の眼差しがもつ恣意性・イデオロギー性を直截に暴露し批判することに力点を置いてきたこともうなずける。対象を分類し、配列・序列化し、支配・保護するというこの特異な眼差しは、思想運動の性格を帯びる一方で、資本主義的な世界システムや、帝国主義と植民地主義といったマクロな政治・経済的力学と絡みあいながら、ヨーロッパによる「有色人種」世界の支配を物理的

に可能にし、道義的・科学的に正当化してきた。こうして生まれた現実の不平等な関係性の是正を求める立場からも、人種を眼差す思潮は強く批判されることになったのである。

しかしながら、こうした脱構築の視点による人種批判の「正しさ」にもかかわらず、現代世界において人種のもつアクチュアリティは減じてはいない。それは「正しくない」思潮による「誤った」影響の残滓でも、イデオロギー効果の残存でもない。人種にまつわる諸現象は、現代世界において日々更新され再生産されている、今日的でダイナミックな社会的現象なのである。本章においては、社会的諸力が複雑で重層的に絡み合う、現代人種現象について、共同性の希求の根源的再評価と、それにもとづくブレイクスルーという視点から検討してみることにした。

## 1 新人種主義の登場

一九世紀に成立した人種主義は、当初、生物体としての人間の身体の可視的区分に依拠して膨張していった。しかしこの古典的素朴な人種主義は、二〇世紀後半以降、新たに登場した新人種主義の見方に置き換えられていった。人種 (race) というターム・コンセプトを活用して、人間集団を絶対的・固定的に区分し、ときには制度的非制度的な不利益を加えるという現象は、近代市民社会が西欧に成立してから今日まで連続と継続しているかのように見える。たしかに一九世紀から二〇世紀後半にいたるまで、この人種主義的現象は、人間の生物学的差異にもとづいておこなわれてきた、(ときに理不尽な) 思考と行為だと見なされてきた。しかし、じつはそうではなく、一九世紀から二〇世紀にかけての人種を捉える眼差しと、二〇世紀後半に生起してきた眼差しは、異なる回路で形成され異なる性格をもっていた。このことを声高に主張しはじめたのは、ギルロイたちイギリスに移住した「非白人」の知識人であった。彼らは、二つの人種への眼差し(人種主義)を峻別して、今日、現象している人種主義を批判的含意を込めて新人種主義と呼んだ。<sup>(3)</sup>

彼らにとって、二つの人種主義は、人種区分を本質化させる点で多くの共通点ももっていたのだが、決定的に異な

るのは、一九世紀的人種主義が、生物学と種観念を核にして成立したのに対して、新しい人種主義は、文化とエートス観念を軸にして形成されている点である。ギルロイが指摘するように、新人種主義は、文化ナショナリズムの傾向を色濃く帯びている。それは二〇世紀後半における、国民国家の膨脹と行き詰まりと軌を一にして出現したものであり、皮肉なことに、多くの点で人種に対して批判的な脱構築論と基盤を共有していると言つてよい。

新人種主義の特徴は、以下の三点にまとめることができるだろう。まず第一は、その構築主義的傾向である。新人種主義においては、人種は、ゆらぐことのない自己アイデンティティの核心でも、自然で不変な身体属性でもない。それは、他者の視線による世界の分割によって像を結んだ構築物にすぎない。その点を見ても、人種の脱構築論の主張とまったく同様であることがわかる。複数の国民国家の形成によって生じた人間同士の関係性の複雑さを、分節化し差異化することで、不平等な優劣関係に組み替え、それを永続的に再生産するために、新人種主義は発動される。

この人種の社会・文化的構築性という性格規定にしたがつて、新人種主義においては、人種の外延はきわめてあいまい、かつ柔軟なものとなる。一九世紀的人種観によれば、ある個体の人種属性は本質的に変更不能であり（なぜなら生物学的特性によつて先天的に規定されているから）、人種共同体も容易に外延を確定できる。境界の明確な人種共同体の内部と外部とのあいだの交通は遮断され、相互の移動は禁じられる（最も直截な表現は、異人種間の性交渉を法的に禁止することだった）。これに対して、新人種主義においては、人種共同体の外延は自在に収縮し、ときには緩やかな人種共同体の外部へと脱出したり、新たに内部へと参入することが可能となる。

新人種主義の第二の特徴は、その非視覚的基準にある。古典的人種主義は、肌の色という一目瞭然の基準によつて人々を一見明確に区分してきた。しかしながら新人種主義は、肌の色や身体の形質といった一目で弁別可能な視覚的基準を採用しない。これらの身体特性とは無関係に、たとえば国民文化の受容と顕示などによつて、人種の同一性を確保していくのである。

新人種主義の萌芽の具体的事例を、アン・ストローラーが報告するインドシナの混血者裁判のなかにみることができ（一八九八年、フランス領インドシナの港湾都市ハイフォンで、一人の青年が、ドイツ海軍の整備士に暴力をふ

るつた罪で禁固六カ月の判決を下された。彼は、フランス海軍の軍属であるフランス人の父とベトナム人の母とのあいだで生まれた青年であった。白人の父は、すぐさま上訴してこう訴えた。「息子にはふだんから愛国心を教え込んでいた。彼は、普仏戦争の復讐の意味を込めてこの行為をしたにすぎない」。青年はベトナム人の母の血が流れているとはいえ明確にフランス人であるという父の主張は、人種の確定には、肌の色や身体的視覚的特徴ではなく、非視覚的な国民文化の担い手度こそが重要だという含意があった。そして現地の裁判所もその含意を了解したのである。そこで、裁判所は、青年の愛国心の程度とは別に、国語（フランス語）の読み書き能力をテストすることで、彼の人種弁別をはかった。その結果、青年はほぼ「国語」に関して文盲であることが判明したため、人種、文化の境界を侵犯した罪をもって有罪と認定されたのである。

この事例が象徴するように、父子のあいだの個人的な感情紐帯や、視覚的身体的な異質性は、同一の人種共同体に属する（あるいは属さない）証明にはならなかった。ナショナルな文化の受容と提示こそが、それを保証する仕組みが確認できるのである。こうした人種観は、当時として新奇なものであり西欧社会に定着はしなかったものの、二〇世紀後半に現象する人種意識（ここで言う新人種主義）においては、ひろく受容されるようになったのである。

新人種主義の第三の特徴は、地球規模で資本主義化が進行する過程で周縁化された諸個人、諸集団が中枢（マジョリティ）に対して異議申立てをするさいに、共同性を仮想する有効な手だてとして活用されてきた点があげられる。たしかにこれまで人種主義は、一貫して負のレッテルを貼られてきた。生物学的な優劣関係をねつ造し固定化するために、優者の論理として流通し消費されてきたからである。しかしながら新人種主義は、ときに社会的に周縁化された人々の主体形成のために、彼ら自身によって操作され駆使される。古典的人種主義の消費流通過程においても、それを逆手にとって弱者が異議申立てをおこなうことはあったし、現在もみることができるといえる。ギルロイはこの新人種主義が、国家主義と共謀して人種をあらたに神秘化する危険性を指摘して、その文化ナショナリズムの性格を批判した。新人種主義もまた旧人種主義と同様に、人種を所与のものとして自然化し、規範的な社会編制体として確定するといっているのである。このような「自然化」された人種観のうえに成立する反人種主義を、彼らは反人種主義的人種主義とし

て弾劾の対象とした<sup>(5)</sup>。しかしながら、新人種主義をこのように一面化することには問題がある。いかにして周縁化された人々が共同性と連帯性を暫定的にであれ実践的に確保し、集合的行動を可能にできるかという切実な要請に誠実に応えることにはならないからだ。それに回答しようとするなら、どのような条件の下で何を留保しながら、こうした人種的共同性を構想できるかという視点から問題を立て直す必要がある。新人種主義の第三の特徴こそ、今日、最も緊要な課題と結びついているのである。

結論を先取りして述べるならば、こうして登場した新人種主義は、現代世界に蔓延する自由主義的・啓蒙主義的人間観（それはまさに強者の人間観にはかならないが）に対抗する人間観を用意していると言えるかもしれない。二〇世紀における資本主義システムは、世界に生じた種々の不平等を自然なものに見せかけるために幾重にも巧妙な仕掛けを用意してきた。世界規模のシステムが必然的に派生させる、資源や利益の偏在、そしてそれらにもとづく社会関係は、自然で原初的な人間区分によって神秘化されてきた。この強力な自然化の力（バリバールにならってそれを新本質主義と呼んでもよい<sup>(6)</sup>）に対抗するのは容易ではない。自由な選択が可能であり、かつ自己責任を行使できる自律した個人という主体は、この自然化の力に到底太刀打ちできない。それどころか、この力を側面から支える別働隊として機能してきた。この啓蒙思想が生み出したリベラリズムの主体に代わって、制度的不平等に敢然と立ちむかうことを可能にするのは、再想像された人種という共同性、すなわち新人種主義にもとづく共同性にほかならないのである。

次節においては、この新人種主義にもとづく異議申立て主体の形成について、イギリスの経験をもとに具体的にみていくことにしよう。

## 2 イギリス社会における黒人性

現代イギリス社会の黒人性を、新人種主義と関係づけて考えようとするとき、スチュアート・ホルルの経験から説明するのはわかりやすい<sup>(7)</sup>。ホールは、一九五〇年代にジャマイカからイギリスに留学したが、アフリカ人奴隷の子孫

が多数派をしめるジャマイカ（それゆえに黒人社会と眼差される）で暮らしていたとき、ブラックとして自己認識をした経験は一度としてなかったという。つまり彼は、黒人アイデンティティの外部に自らを位置づけてきたのである。祖母はライトブラウンからダークブラウンまで一五近い皮膚の色を識別できたという。だがそれらを指してブラックという他称・自称は聞いたことがなかった。しかしイギリスに渡ると、周囲の白人社会からホールはブラックとして眼差され、そのように取り扱われた。

ホールは、有色人種に対して抑圧的なイギリス社会において、拠り所となる場所を確保するために自らが「ブラック」であることを認識する。それは人種主義に対する防衛的アイデンティティの組織化でもあった。ナイジェリアやガーナなど旧イギリス植民地であったアフリカ諸国からの移民と同一のブラック・カテゴリーに、ジャマイカからの「ブラウン」の肌をもつ留学生は参入したのである。この時代、ジャマイカからだけでなく、ほかのカリブ諸国や南アジア地域そしてアフリカ諸国から大量の移民がイギリスに流入していた。彼らは、一九七〇年代、社会に人種的緊張が高まると、マジヨリティからの人種差別に対抗して、ブラックとして自己形成をはじめた。イギリスに来るまでは、身体化されることは決してなかった黒人性を、インド亜大陸からの移民たちもホールと同様身につけはじめたのである。

それはまさに新人種主義、それも周縁化された人々が採用した戦術としての新人種主義そのものであった。移民たちは肌の色とは無関係に、人種差別的なイギリス社会において否定的な意味でしか用いられてこなかったブラックを、自らのセルフ認識として前面に打ち出していった。ちょうど一九二二年に日本の被差別部落の民衆が「水平社宣言」を発し、「吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ」と否定的で差別的な呼称を、肯定的自己認識へとあえて転換させた思考と実践に重なりあう。それは、社会の多数派メインストリームから差別され排除されてきた人々が、周縁化されさげすまれてきた自らの立場に道徳的な優位性を確認する作業でもあった。ブラック意識は、こうして異なった身体的特徴や文化的特性をもつさまざまな社会集団を、新たに再想像された黒人性によって包摂し、集団横断的な連帯の基礎を提供することになったのである。

もちろんそれは、外延の確定した単一の人種共同体としてのブラックではなかった。周縁化された当事者たちが、新人種主義を活用しておこなう柔軟な自己形成運動だった。こうしたマイノリティがおこなう防衛的集合的なアイデンティティ生成を、ホールは、アイデンティティ・ポリティクスと呼んだが、圧倒的に非対称な力関係において、マジョリティによる分断統治を回避するためには、たしかに有効な戦術であった。<sup>(9)</sup>

マジョリティ社会から疎外される人々には、この集合的なアイデンティティを体感させるたしかな手がかりがあった。それは、生活世界における共通の被害感覚といったようなものだ。下層労働者がかたまつて暮らす地区は、ロンドンのなかでも、上層、中間階層居住地区とはまったく分離され、独特の低位文化を形成している。貧しい労働者の生活においては、微細な局面場面における受苦の経験は、集合的な記憶として一元化され共有される。個々人の置かれている具体的状況は多元的であっても、それらを貫く被害者の感覚は均質化され標準化されたうえで、集合的な記憶となっていく。

ロンドンの下層労働者地区でケースワーカーをしたことがあるトレイシー・レイノルズは、アフリカ系、カリブ系、南アジア系の移民労働者の女性の生活世界においては、たしかに人種、性、階級の三層差別が存在しているもの、ともに被害を受け「白人」から剝奪されているという生活経験が互いに重なりあい共鳴する瞬間を指摘している。そうした経験からすると、ブラック・フェミニストたちが主張する、性と人種の固定的優劣関係への弾効は違和感を感じざるをえないことになる。たとえばブラック・フェミニストの代表的論客であるベル・フックスは、女性の連帯を語る白人フェミニストへの敵愾心と非難を強い口調で表明したことがある。彼女は、白人女性がおこなう「人種差別は白人男性の家長制に特有なもので、(…)私たち女性は人種差別に荷担しない」という主張を真っ向から否定する。白人女性の権利の擁護者は同時に黒人との社会的平等を支持したという言明を、「恐るべきロマンティズム」と一蹴し、そのような主張を裏づける歴史的証拠は何もないと断言してしまうのである。<sup>(10)</sup>

ベル・フックスのような性と人種の外延を確定し相互の通交を否定する見方に対して、レイノルズは、貧困、家庭崩壊、失業などを共有する下層労働者の生活世界においては、相互扶助の実践や社会福祉のための援助を通じて、人



種の外延がダイナミックに収縮していることを明らかにした。新たなブラックという人種の創成の場がそこには確認できたのである。

ところが、この緩やかなブラック共同体も、時間の経過とともに崩壊の足音が聞こえるようになる。ブラック共同体を創成する原動力は、幅広く異質さを包摂する創造的な力であったはずだ。しかしそれは、一方で文化的ナシヨナリズムとも強い近縁関係をもつものだった。こうした人間分節を包摂する力は、国民国家の領域内に限ってその効力を発揮するのが通例だ。このナシヨナルな拘束に対して、最も激しく衝突するのは、根源的な文化的多元性の承認を求める主張であった。つまり、社会で周縁化された人々が、防衛的に集合的なアイデンティティを形成しようとするとき、皮肉なことに、その試みにとつての最大の障害は、(もともと少数者の権利を保障するために生まれた) 文化的多元性を称揚する言説と実践ということになる。なぜなら弱者の権利防衛のために異質な社会集団が共同性を構築しようとしても、各集団が他集団との差異を強調し、その承認と尊重を要求すれば、そもそも共同性の創出など不可能になってしまうからだ。その錯綜した事例を具体的にみることにしよう。

イギリス社会においてブラック共同体の一員として包摂された南アジアの移民とカリブ海地域からの移民のあいだで、まずこの差異の確認が作動しはじめた。<sup>12</sup> この二つの移民集団は、イギリスの人種差別社会において、対照的な受容戦略を採用している。後者は、開放的なサブシステムをイギリスのナシヨナルシステムに接合することによって、マイノリティとしての地位を公認されている。たとえばレゲエやラップといった彼らの音楽は、グローバル化のなかで世界商品となり、マジヨリティ社会にも流通し消費されている。またイギリス下院に議席を獲得することに象徴されるように、周縁としてナシヨナルシステムに参入することに成功している。これに対して南アジアの移民は、風俗・慣習・服装などの文化的差異を保持し、ナシヨナルなイギリス社会への参入よりも、母社会との紐帯を強調する。(イギリス社会からみれば) 閉鎖的対応をとることになった。そのため多数派社会からは、無視と排除の対象とされる。その傾向は、パキスタンやバングラデシュ出身のムスリム移民に対してはより露骨に示される。アメリカの同時多発テロとアフガン・イラク戦争以降、彼らは、たとえイギリス社会で生まれ教育を受けた移民二世三世であっても、完

壁な異人として眼差されるようになった。<sup>19)</sup>

このように一時期は、防衛的集合的アイデンティティを共有するブラック共同体を構成した両者であったが、イギリス社会の中心との距離のとり方の違いによって、二つの集団の共同性は切断され別個の共同性を希求せざるをえなくなってしまうた。

現代社会において周縁化された位置に置かれた人々が、生活の必要から人種的共同性を創出するという実験は、一見すると、頓挫してしまつたようにみえる。では、このような状況に生きる彼らにとつて、自己認識、それもより彼らの立場を防御し改善することが可能なような自己認識は、どのようにして現出できるのだろうか。考えうる選択肢は限定的である。周縁グループとしての共同性を放棄して、自律し自己責任を果たす個人として全体社会に参与することも選択肢の一つだろう。ただしその場合、彼らは中央権力によって分断統治され、結局、二級市民として配分のおこぼれを得ることになるだろう。では、カリブ系移民のように、自らを「正統な周縁」として全体社会の構成要素となるオブションはどうだろうか。この場合も、中心―周縁関係は、マジョリテイ、マイノリティ双方の側から再生産されることになり、周縁を周縁たらしめている制度や構造の改変は望むべくもない。

今日、求められているのは、人種主義にもとづく不平等が社会のすみずみにフォーマル、インフォーマルに遍在しているなかで、マイノリティの立場に周縁化された人々が、どのようにして共同性を創出できるかという課題に答えることである。なぜなら共同性を介在することなく、直接、周縁化された諸個人が、中心の権力に対して実践的に対峙することなどできるはずもないからだ。ここで言う共同性は、一九世紀的な身体的、先天的な属性を本質化（自然化）して、それに屈従する共同性を意味しない。それでは、中心権力に向き合うことはできない。なぜなら近代国民国家の権力作用は、外延を定め、支配の基本単位（人種や民族、家族など）を固定してそれを自然化することによって成立しているために、それに依拠して対抗しても、結果的に、その構造をかえって補強してしまうことになるからである。<sup>14)</sup>

では、どのような共同性創出の可能性があるのだろうか。